



第4回
早春の会
合唱団
演奏会

プロフィール

- 1993年 3月 早春の会合唱団として発足
常任指揮者に松田匡史氏を迎える
- 10月 第39回目黒区合唱祭に参加（目黒公会堂）以降毎年参加
- 1994年 11月 第36回都民合唱コンクール 小ホール部門第一位
- 1995年 10月 第37回都民合唱コンクール 招待演奏（東京文化会館大ホール）
- 1996年 10月 第38回都民合唱コンクール 小ホール部門第一位
- 1997年 11月 第39回都民合唱コンクール 招待演奏（東京文化会館大ホール）
織田久男先生謝恩コンサートに出演（こまばエミナース）
- 12月 東京文化会館主催クリスマスコンサートに出演（東京文化会館小ホール）
- 1998年 2月 世田谷ロータリークラブ35周年祝賀コンサートに出演（東急文化会館ゴールデンホール）
- 1999年 8月 常任指揮者に井上実氏を迎える
- 11月 上野の森コーラスパークに参加（東京文化会館大ホール）
- 2000年 6月 第1回早春の会合唱団演奏会（こまばエミナース）
- 10月 第41回都民合唱コンクール 大ホール部門第四位
- 2001年 2月 常任指揮者に玉置清明氏を迎える
- 9月 上野の森コーラスパークに参加（東京文化会館大ホール）
- 10月 第42回都民合唱コンクール 大ホール部門入賞
- 2002年 7月 第2回早春の会合唱団演奏会（東京文化会館小ホール）
- 9月 第43回都民合唱コンクール 大ホール部門奨励賞
- 10月 ウィーンピアノ四重奏団と共演（女性のみ）めぐるパーシモンホール
- 2003年 2月 都立目黒高校合唱大会招待演奏 めぐるパーシモンホール
- 9月 第44回都民合唱コンクール（東京文化会館大ホール）
- 2004年 9月 第3回早春の会合唱団演奏会（東京文化会館小ホール）
- 10月 第50回目黒合唱祭に参加（パーシモンホール）
- 2005年 1月 新実徳英先生作品展に参加（秦野市文化会館大ホール）
- 10月 第51回目黒合唱祭に参加（パーシモンホール）
- 2006年 4月 目黒林試の森コンサートに参加（都立林試の森）
- 9月 第4回演奏会（東京文化会館小ホール）

ご挨拶

名誉音楽顧問

織田久男

本日、四回目の定期演奏会をもつ事が出来たのはまことに喜ばしい事です。二年に一度とは言え、一つの目標に向かって全員が心を合わせて努力するのは意義のあることです。とは言うもののその内実は、無理を重ねて、やっとの思いで今日の開催にこぎ着く事ができたと言うのが本当のところですよ。

今や、全ての団員が五十歳台になり、次回の定演では還暦を迎える人もいます。社会的には責任ある立場にあって多忙を極め、また家庭にあっては、やっとう子育てから開放された人も、今度は親の介護に気の休まる暇もありません。加えて、そろそろ自身の健康にも問題が生じて、かなりの人が薬の世話になっているのが現状です。

こうした中、口で定演に向けて努力すると言うのは簡単ですが、内から見ているとこれは並々ならぬ努力であって、強い意志なくしては成り立ちません。団員も家族も無理を重ねている姿を見るにつけ聞くにつけ、胸が痛みます。彼らの活動には本当に感心すると共に、敬意を感じずにはられません。

しかしながら、だからと言って音楽に関しては妥協は許されません。我々が目標とする『心から心へ』の音楽表現は、いつも変わらずに持ち続けてほしいものです。決して技術を軽視するわけではありませんが、技術的に完璧な演奏に接しても、その美しい響きに心や情感の裏付けがない場合、『感心』はしても『感動』する事はできません。一つの言葉にも一つの音にも、一つのハーモニー、フレーズにも、心と情感の裏付けがなくては、それは単なる『音響』にしか過ぎないからです。技術は手段であっても目標ではないのです。今日の演奏がどれだけ聴く人の心の琴線に触れて、真に感動的な演奏に仕上がっているか、心配でもありますが、また期待しているところです。

本日はご多忙のところをお運びいただき、本当に有難うございました。心から御礼申し上げます。

織田久男先生

1964～1971年の都立目黒高等学校の音楽部(合唱クラブ)顧問。「音楽に高校生向けも大人向けもない」とあふれる情熱で音楽指導して下さる。音楽だけではなく絵画、文学、映画、古典芸能、塑像、建築など様々な芸術表現のありようとその楽しみ方を教えていただく。

御 礼

早春の会合唱団 団長
平 部 正 和

本日はご多用の中、私達早春の会合唱団の演奏会にご来場頂き、誠に有難うございます。2000年の初回演奏会以来、2年に1度の演奏会を開かせていただき今回第4回目となりました。これも団員のご家族はじめ、私達の活動を暖かくご支援していただいている皆様のお陰と厚く御礼申し上げます。

土曜の午後という週末のゴールデンタイムにも拘らず、歌の仲間が西は秦野から、東は船橋から練習会場(守屋教育会館 祐天寺駅)に集まってきます。一人一人が「より良い演奏をしたい」という一心で集まってきます。この練習の成果を本日の演奏を通して少しでもお伝えできれば幸いです。



本日は「早春の会合唱団」の演奏会におこし頂きまして、誠にありがとうございます。二人の指揮者を迎えて二つの組曲を柱に、心から合唱を楽しみたいと思います。演奏会を開催するにあたり、ご家族、友人、早春の会の皆様に感謝とお礼を申し上げます。

演奏会実行委員長 加藤 修 司

木下牧子 作品

夢みたものは 詩 谷川俊太郎

おんがく 詩 まど・みちお

新実徳英 作品

生きる 詩 谷川俊太郎

聞こえる 詩 岩間芳樹

「旅」 山之井 慎/田中 清光 作詩 佐藤 眞 作曲

旅立つ日

村の小径で

旅のよろこび

なごさ歩めば

かごにのって

旅のあとに

行こう ふたたび

休憩

「^{とき}光る刻」 木下 牧子 作曲

老いたきつね

もぐら

鹿

象

<男声合唱>	Selig sind die Toten/Beati mortui	メンデルスゾーン作曲
	Beautiful Dreamer	フォスター作曲
	いざ起て戦人よ	グラナハム作曲
<女声合唱>	アニーローリー	スコットランド民謡
	ロンドンデリーの歌	アイルランド民謡
	フニクリフニクラ	L・デンツァ作曲
美しく碧きドナウ		ヨハン・シュトラウス作曲

指揮 玉置清明・井上実 / ピアノ 仲谷智子

早春の会合唱団

曲解説

「旅」山之井 慎 / 田中清光 作詞 佐藤 眞 作曲

合唱を経験した人は、必ずや一度は歌ったり、聴いたりしたことであろう名曲です。希望にあふれ旅に出た若者は、そこで様々な体験をします。小さな村でのお話、明るい風景に旅の喜びを知り、たった一人歩むなごさでは、あまくせつない夏の思い出が・・・やがて疲れきった若者は、静かにその旅を終えます。しかし若者は、美しい思い出とともにふたたび旅立ちます。さらに力強く、新たな決意をもって！

この組曲は、第一曲と終曲が「行け 旅にいまこそ！ 憧れになわれて」という、全く同じ歌詞ではじまり、そして終わっています。この全く同じ歌詞が、7つの曲を通して違った感動をもって皆様にきいていただけるよう表現できればと思っています。

井上 実

「光る刻」 木下牧子 作曲

動物の孤独と死をテーマにした4つの詩を集めたこの組曲は、木下牧子氏の比較的初期の作品で、1987年に「けものたちの孤独」という組曲名で初演され、作曲者自身によって「光る刻」と改題された。生と死の臨界にあって、命のすべてを包括し燦然と輝く刻々が、光と陰に彩られながら厳粛に描き出されてゆく。

合唱とピアノにより色彩豊かな光景が目の前に広がってゆき、その大きな強い包容力は、いわば宗教から隔てられている私にとってレクイエムのように感じられ、安らかな解決として心の奥深くにしみわたってゆくのです。

I 老いたきつね

光と影に、風と生命が交じわる最も安らかな眠り。風景の中にとけ込んだきつねの孤独で自然な終息。

II もぐら

一見楽しそうなりズムの裏は、誰もが自分を重ねたくなってしまう生活の悲哀。「もぐらの極楽すごく暗く・・・」喜劇でしか語り得ない人生のアイロニー。

III 鹿

「生きる時間が黄金のように光る・・・」フレーズが繰り返される度に、輝きを増し存在を際立たせてゆく生命の臨界。銃口に狙われ死に直面した鹿のほんの短い時間が、永遠のように停止する。「光る刻」に寄せる作者の思いが頂点に向かって凝縮してゆく。

IV 象

巨象が孤独に墓場へ向かう。自らの完結を祝福するかのように、地響きを轟かせて走る。そして、身の中に宿る連綿とした生命の連なりは、個体を超えて確かに永続する。輝く太陽に照らされ、響きわたる啼き声に万感の思いをのせて、象は走る。

玉置清明

組曲旅 佐藤眞作曲

1 旅立つ日 田中清光

行け 旅に
いまこそ!
憧れに になわれて

行け 旅に
いまこそ!
はてしない山路を行け

草原に草雲雀
ひかりはみなぎり
ああ 湧きあがる
よるこびの歌声

行け 旅に
いまこそ!
はてしない海辺を行け

山脈に風わたり
われをいざなう
ああ 湧きあがる
希望の歌声

行け 旅に
いまこそ!
憧れに になわれて

2 村の小径で 山之井 慎

村のじさまが語ってくれた
いろりパチパチ 昔のはなし
村のじさまが語ってくれた
人を化かした 狸のはなし

村の地藏さんが おしえてくれた
この径ホ口ホ口 山鳩なくよ
村の地藏さんが おしえてくれた
野兎とぶぞ 腰ぬかすなよ

峠の一本杉 送ってくれた
狐火ボウボウ 迷子になるな

3 旅のよるこび 山之井 慎

飛んでる飛んでる 飛んでる雲が
みどり山脈 わたって飛ぶぞ
おーい!

そよ風にむけ いま叫ぶ
旅のよるこび
はるか青空にいま心ひらく
旅のよるこび
ここにいま知る

飛んでる飛んでる 飛んでるかもめ
白いマストをかすめて飛ぶぞ
おーい!

汐風にむけ いま叫ぶ
旅のよるこび

かなた黒潮にいま心ひらく
旅のよるこび
ここにいま知る

飛んでる飛んでる 飛んでる夢が
はるか夕日にむかって飛ぶぞ
おーい!
夕やけにむけ いま叫ぶ
旅のよるこび
はや 明日を呼びいま心開く
旅のよるこび
ここにいま知る

4 なぎさ歩めば 山之井 慎

なぎさ歩めば
きこゆるは 遠き汐鳴り
せつなくも 胸をうつ
遠く過ぎし日 めぐるめく ひかりの波に
声あわせ しぶきあけて 一匹の魚の
ほとばしる あの日の宴よ
なぎさ歩めば
なつかしき 夏の想い出うかぶ

さびしきあまき愁い
はかなくも夢みたる
はるかな海原は
藍にかげろう
なぎさ歩めば
なつかしき夏の想い出うかぶ
はてしなき 想い出

5 かごののつて 田中清光

えーいッホ えーいッホ
かごがゆれてく
そば咲く道
浅間嶺ごしに青空みれば
羊の雲が
はるばる浮ぶ
かごかき 帽子が おおきくゆれた

えーいッホ えーいッホ
峠こえれば
きび咲く道
落葉松林にコガラがないて
すすきの手袋
かすかにゆらぐ
かごかき 帽子が おおきくゆれた

ゆうらり ゆうらり
提灯ともし
夜つびて
旅して行くならば
ゆうらり ゆうらり
心のなかで
ひとつの星が
うまれましょ

えーいッホ えーいッホ
村にはいれば
つるべが軋む
稗屋根ごしに夜空をみれば
星屑ながれ
さむざむ消える
かごかき 帽子が おおきくゆれた

6 旅のあとに 田中清光

疲れきって
わびしいはたごに
足を 投げだす
ああ 道は
立ちこめる闇に消され
地図も失くした 旅のおわり

疲れきって
枯葉の丘に
足を 投げだす
ああ 風は
吹きぬける胸のうつろを
空も翳った 旅のおわり

薔薇色の雲は くだけて
夢は消え ひかりほろび
ああ いまは哀し
旅のおわり

疲れきって
わびしい港に
出船を 見送る
ああ 海は
ふりしきる雨昏れて
ひとり帰ろう 旅のおわり

7 行こう ふたたび 田中清光

語ろう
美しい旅の日を
想い出は
あまく かなしく
はかなく さびしく
心の傷を
くりかえし
撫でるとも

行こう
ふたたび
旅立とう
われらのまなかに
白雲ながれて
われらの心は
希望にもえたつ

ああ 未来は明るく輝やき
いまこそ 旅をおもう
行こう
美しい旅に

行け 旅に
いまこそ！
憧れに になわれて

組曲 光る刻とき 木下牧子 作曲

I 老いたきつね 蔵原伸二郎

冬日がてつている
いちめん
すすきの枯野に冬日がてつている
四五日前から
一匹の狐がそこにきてねむっている
狐は枯れすすきと光と風が
自分の存在をかくしてくれるのを知っている
狐は光になる 影になる そして
何万年も前からそこに在ったような
一つの石になるつもりなのだ
おしよせる潮騒のような野分の中で
きつねは ねむる
きつねは ねむりながら
光になり、影になり、
石になり雲になる夢をみている
狐はもう食欲がないので
今ではこの夢ばかりみているのだ
夢はしだいにふくらんでしまつて
無限大にひろがつてしまつて
宇宙そのものになつた
すなわち
狐はもつとどこにも存在しないのだ

II もぐら 木島 始

ふかい ふかい ふかい
もぐらの ごくらく すごく ぐらく
くらやみのなか あなのなか

おいらは
ちつちやい
ひばなに
めがくらむ
しやにむに
はなのねもと
ほつていく
てさぐり
めさぐり
はなさぐり
くるしまぐれ
きまぐれ
おいらは
きらく

ふかい ふかい ふかい
もぐらの ごくらく すごく ぐらく
くらやみのなか あなのなか

III 鹿 村野四郎

鹿は 森のはずれの
夕日の中に じつと立っていた
彼は知っていた
小さい額が狙われているのを
けれども 彼に
どうすることが出来ただろう
彼は すんなり立つて
村の方を見ていた
生きる時間が黄金のように光る
彼の棲家である
大きい森の夜を背景にして

IV 象 吉原幸子

象が啼く
密林の梢 ぶりかかる 青い空またいで
象よ啼け れうれうと 墓場への道

この一瞬に綴じられた 父の死を 祖父の死を
とほい祖先の いくつもの死を
身のうちに ありあり憶ひだしながら
この かがやく昼に 酔ひながら

日々に ちらばつてゐた 生の かけらかけらを
いまこそ よびあつめ
うつくしいひとつのものに まとめあげ うたひあげ
彼らの " 永遠 " に参加するため
人知らぬ聖なる地へ 走るけもの

ちつぽけな月よ 舞へ
灰いろの雪よ 降れ
空にすぎひき 海にすぎひいて 人よ争へ

密林の梢
鳥たちは 静かに 黒い卵を抱いて坐り
ぶりかかる 青い空 またいで
れうれうと 象は啼く



■指揮 玉置 清明

都立目黒高校、東京芸術大学音楽学部声楽科卒業。

教職を軸に独唱、合唱、オーケストラ、吹奏楽、編作曲、美術制作など幅広い活動が続いている。熊谷守一大賞展等多くの公募展に入賞。早春の会合唱団、秦野市民交響楽団指揮者。神奈川県立秦野高校教諭。



■指揮 井上 実

都立目黒高校、国立音学大学音楽学部声楽科卒業。

早春の会合唱団指揮、小学校の指導教材中心とした作曲・編曲を行っている。リコーダーの演奏及び講師活動などを通して、幅広く教育活動に寄与している。

主な作品「動物の森」「花のうた」(共にトヤマ出版)



■ピアノ 仲谷 智子

都立目黒高校、武蔵野音楽大学音楽学部ピアノ科卒業。

久富綾子、澤田紀子の各氏に師事。ピアノ教室主宰、サロンコンサート等の企画、演奏活動を行っている。

早春の会合唱団創団時より伴奏をつとめる。



2006.9.18(月・敬老の日) 14時開演・東京文化会館小ホール

Design by PLANTA